異世界に飛ばされました。

探偵川上Q

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界に飛ばされました。

【Ｎコード】
Ｎ５３５２Ｚ

【作者名】
探偵川上Ｑ

【あらすじ】
魔王を倒すため異世界に送り込まれた二階堂悠木。はたして彼は魔王を倒せるのか？

プロローグ。（前書き）

カメ更新になると思われますが、よろしくお願いします。

プロローグ。

……結論から言おう。

俺は異世界に飛ばされるらしい。

何故か？……それは目の前にいる、こいつ等に聞いてくれ。

「うーんとね、一応こいつが僕の世界の中で、君の世界に合いそうな奴だよ」

「へー、こんな奴が？」

人の事をこいつとか、こんな奴とか呼ばわりする自称神に。

「「自称じゃないよ」」

「いいかい、僕は君が住んでいた世界の神」

「んで、僕が別世界の神なの」

「それでだね、何故君がここに呼ばれたかというとだね」

「それは、僕の世界が大変なことになってるんだ」

おい、代わる代わる喋るな。

どっちが喋ってるのか分からなくなるじゃないか。

「僕の世界はね、君の世界で言うと剣と魔法のファンタジーってやつだよ」

「で、僕は別世界の神から助けを求められて、君を呼んだんだ」

「今、僕の世界では魔王って奴が無茶苦茶してるんだ」

「それをどうにかするために、君を送り込むんだ」

なんで俺が？

アンタ等が神様なら、どうにかできるだろ。

「それがね、僕ら神はね」

「天地創造の時にしか、手出しできないんだ」

……ちょっと待て。俺をその別世界に送り込むのだって、手出しすることになるんじゃないか？

「それは違うよ」

「僕らが手出しできないのは、生き物の生死に関する事だけなんだよ」

「つまり、君を送り込んだところで、魔王の死が決定するわけじゃないんだ」

「ということで、君にはいわゆるチートを付けてあげるから、向こうの世界で頑張ってね」

は？ちょっと待て。まだ俺は異世界に行くとは言ってないぞ！

「無駄無駄、君に拒否権は無いよ」

「で、君にあげるチートは、この武器とある能力だよ」

そう言って、俺の前に置かれたのは白銀の太刀だった。

「これはね、ランス、太刀、双剣の三種類に変形させることが出来て、切れ味も落ちない」

「で、能力の方は『エアロック』っていう能力だよ」

「『エアロック』はね、一時的に空気を固めることが出来るんだ」

「つまり、これを使えば、二段ジャンプどころか、空中で色んな動きができるんだ」

「ただし、連続使用は二十回までだから気を付けてね」

「「というわけで、いってらっしゃい」」

おい、待てやこら。

何がいってらっしゃい、だ。

って、なんで俺は浮遊感に包まれてんだ？

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？！？」

俺は超上空から落下していたのだった。

一話　異世界人との初コンタクト。

ｓｉｄｅ　フェイ

「この堅物オヤジ！！」
「そりゃこっちのセリフだ、この我が儘娘！！」

私は今、ギルドでヴァルスさんと言い合いをしていた。

「いいじゃない！別に一人で任務受けても！！」
「ダメだっつってんだろ！ギルドでは二人一組（ツーマンセル）が基本だっていってんだろ！！」

毎日こんなやり取りをしているのだが、なかなか折れてくれない。

「もういい！勝手に行くから！」
「あ、おい！止めろフェイ！」

私はヴァルスさんの制止も気にせず、ギルドを飛び出した。

「いいもん、認めてくれないなら、実績を出すまで！」

私は意気揚々と近くの森に向かって走り出した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ヴァルス

「あんのバカ……！」

フェイのことだ、どうせ実績上げて認めてもらおうって思ってんだろ。

「リン、サヤ！」
「なに？」
「どした～？」

俺は二人を呼び、事情を話した。

「つまり、フェイを連れ戻せばいいのね？」
「あぁ、悪いな。疲れてる所」
「いいよ、別に。フェイは妹みたいなもんだし」

二人とも快諾してくれた。
ホント、いい奴等だぜ。

「じゃ、行ってくるわ」
「マスターは、ゆっくりしててよ」

そう言いながら、二人は出て行った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は落下しながら、どうにか体勢を整えようとしていた。

「ンなこと、できるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？」

ぐるぐる回りながら、どんどん地上に近づいているのが分かる。

「くっそ……！どうすりゃいいんだぁぁぁぁ！」

その時、手に何かが当たった。

それは、いつの間にか腰につけられていた、あの白銀の太刀だった。
俺はある漫画のシーンを思い出した。
もし、この武器の変形したランスが、俺が思っている形をしていれば……。

「そんなことできるかどうか、分からないけど……」

やるしかない。
俺は太刀を手に取り、ランスを思い浮かべた。
すると、太刀が一瞬で姿を変えていた。

「うおっ！？」

その瞬間、ランスを下にした状態で、落下し始めた。
おかげで、体勢の方は安定した。
そのランスの形は、柄の部分で俺の身長と同じぐらいの長さがあり、刀身は柄の二倍以上の長さがあった。

「……これってランスというより、大剣じゃないか？」

そんな疑問をよそに、落下速度は増していた。
俺は大急ぎで鍔に足を乗せた。
そして、そのまま落下速度を上げながら、落ちて行った。

ｓｉｄｅ　フェイ

私は森の中をモンスターを倒しながら突き進んでいた。

「なによ、こんな弱い奴等のためにペアを組むなんて」

剣に付いた血を、剣を左右に振って飛ばした。

「さーて、何か実績を示せるものが欲しい所なんだけど……」

そんなことを思っていると、少し開けたところにデカいモンスターが寝ていた。

「……よーし、コイツを倒して……」

私は足音を殺して、後ろから近づいて行った。

だが、途中で木の枝を踏んでしまい、モンスターが目を覚ました。

「まずっ！」

そう思った時には遅かった。

モンスターの尻尾が腹に当り、吹き飛ばされて木にぶつかった。

「かはっ！？」

肺の中の空気が全て吐き出され、その場に倒れこんだ。

「うがぁぁぁぁぁぁ！！」

もうだめだ、と思った。
モンスターは手を振り上げていた。
その時だった。

「うおおおおおおおおおおおお！？！？」

空から声が降ってきた。

side out

俺はどんどん加速して落ちて行っている。
息がうまくできない。

「くっ……」

今まで怖くて下が見れなかったが、勇気を出して下を見てみた。
すると、森の中の開けた場所にいる、デカい獣の上に落ちようとしていた。

「うおおおおおおおおおおおお！？！？」

俺は叫び声をあげながら、獣を大剣で切り裂きながら、地面にクレ

ーターを作り上げた。

「ぎゃあああああああ！？！？！？」

何かが悲鳴を上げながら倒れこんだ。

「ゲホッ、ゲホッ！」

土煙にせき込みながら、大剣を肩に担ぎクレーターから這い出ると、木の近くに倒れこんだ女の子がいた。

「お、おい、大丈夫か？」

「うーん……」

「……気絶してんのか？」

というか、この子の服装って、どう見てもファンタジー丸出しだよな……。

剣を握っててて、皮の鎧を身に着けているし、盾も近くに転がっている。

そんなことを思っていると、突然後ろから声を掛けられた。

「あなた、何してるの？」

「あ？」

振り返ると、東〇に出てくるナイフを投擲するあの人を彷彿とさせる見てくれの女の人と、ゴシック特有の黒を基調とした服装の女の人が立っていた。

「あれは、君が？」

ゴシックさんが指差した先には、先程倒れこんだ獣がいた。

「あ、あぁ、そうだけど？」
「ペアは？」
「ペア？なんだそれ？」
「「は？」」

二人が呆れたような顔をした。

「あのね、基本こういう所を行動する際は、ペアで行動するの。どうみても、君ってギルドの人間だし」
「ギルド……？」

ギルドってあれか？
クエストを受け付けるところ、みたいな？

「とりあえず、何処のギルドの所属か教えてくれるかしら？」

東〇のナイフ以下略が、話しかけて来た。

「何処の所属って言われても、答えようがないぞ。どこにも所属してないし」

そりゃそうだ、さっきこの世界に来たばかりだし。

「何処にも……？」
「おかしいなぁ……とりあえず、ウチのギルドまで来てもらおうか。そうすれば、問い合わせもできるし」
「そうね」
「というわけで、君。フェイを担いで、ついて来て」

「フェイって誰だよ」
「そこに横たわってる女の子」
「アンタ等のどっちかがすればいいだろ？」
「君、男なんだから頑張りなよ」
「おいおい……」

その後しばらく粘ってみたものの、結局俺が担ぐ事になった。
そのため、肩に担いでいた大剣を太刀に戻し、腰にしまった。

「へぇー、珍しい武器持ってるね」
「ンなことはどうでもいいから、さっさとしてくれ」

なんでもいいから、とりあえずこの世界についての情報が欲しい。
あの神たちの口ぶりだと、元の世界に戻りたかったら魔王を倒せということだろう。
あいつ等のせいで変な所に飛ばされたけど、こうなってしまっては仕方ない。
楽しんでやろうじゃないか。
こうして、俺の異世界での冒険が始まるのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5352z/

異世界に飛ばされました。

2011年12月18日00時48分発行